

氏名	鳥居 小百合
学位の種類	博士（宗教思想）
学位記番号	人博甲第 14 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 21 日
論文題名	新神学者シメオン研究 ―祈りにおける光・涙・神化―
審査委員	主査
	（教授）鳥巢 義文
	（教授）金 承哲
	（教授）西脇 純
	（教授）出村 和彦（岡山大学）

1. 論文の内容の要旨

本論文は、東方キリスト教会において新神学者と呼ばれたシメオン（949-1022年頃）の神秘思想について、彼がおもに聖ママス修道院院長として修道者の霊的教育のために行った教理講話や神学的論考、倫理的論考そして賛歌などを原典に基づいて研究することにより吟味し、その内容の独自性を明らかにすることを目的とする。

本論文は、序論に続く3部で構成される。その第1部は新神学者シメオンにおける光、第2部は新神学者シメオンの悔い改めの祈りと涙、第3部は新神学者シメオンにおける観照と神化についてであり、終わりに結論が述べられる。

第1部では、東方キリスト教会の他の思想家とも比較しながらシメオンの光概念の用法を分析する。それによれば、闇とはこの世のことであり、光は神である。人は肉体を持つゆえにこの世に縛られて神を忘れるが、それが罪でありまた闇である。シメオンは当時の霊的教育の慣習に反して自身の知性および魂の浄化に関わる2度にわたる「光体験」を修道者たちに語ったが、その2度目の光体験中に神の光のそばに見た師父シメオン（-986/987年。新神学者シメオンがストゥディオス修道院にて師事した恩師）の幻影に関する解釈（「霊的師父を見るときに、キリストを見ている。」）は、個人的な体験を重視するシメオンの神秘思想の基礎をなしている。

第2部では、シメオンによる悔い改めの祈りとそれに伴う涙の意味について論じる。シメオンの祈りは、罪の自覚と神の想起から始まり、全身を用いて天を仰いだりひれ伏したりする苦行の内に神の憐れみを祈る方法をとる。東方キリスト教会の伝承である「主イエスの御名の祈り」の精神を共有するものの、シメオンの祈りの特徴は魂だけでなく身体の浄化を強調する点にある。また、祈りの間に流される涙は伝承の中では神から与えられる賜物と考えられるが、シメオンは「悔い改めの涙」を「第2の洗礼」とも呼び、人が洗礼（「第1の洗礼」）を受けた後も神を忘却し罪を犯すので、その罪を浄化するためにこの悔い改めの涙が必要であると説いた。それは神から与えられる「精神の暗闇を清め、私を輝かす涙」とも呼ばれる。

第3部では、シメオンにおける神化思想と観照の概念について論じる。悔い改めの涙によって浄化された魂には神が内在する。神の内在という思想は伝承に従うが、シメオンはその内在について、さらに、神の光体験をした人は「胎児としてキリストを持ち、彼（キリスト）の母とみなされる」と述べる。神化とは人が涙によって魂と身体を浄化し、その浄化に応じた神的な光に与りながら歩む道のみである。シメオンの苦行を伴う悔い改めの祈りは、既にこの世において神化への道のみが始まっていることを修道者に自覚させる。また、このような神化には神との対話である観照が不可欠である。東方キリスト教の伝承では神との対話である観照は一般的に上昇的表現で語られるが、シメオンは下降的表現を用いて観照の深まりを説いている。彼はそれを海の水の深みに入るという表現で語った。なぜならシメオンにとって、神は自身の魂に内在するものであり、その神との一致は自身

の魂の奥底に入ることにより達成されると考えているからである。

結論では、全体が総括される。

2. 論文審査の結果の要旨

本論文は、光、涙、神化という鍵となる概念を中心にして新神学者シメオンの霊性の特徴を明らかにする研究である。

従来研究が少ない新神学者シメオンについて、第 1 部において、光体験の中で師父シメオンが登場するというシメオン自身の個人的な霊性の特徴に着目した点、またそれがもたらす教会位階制との緊張関係を指摘した点、第 2 部において、悔い改めの涙も神から授けられる恵みと捉え、それを「第 2 の洗礼」と呼ぶほど重要視していることを指摘した点、とりわけ第 3 部において、神化の表現における観照の高まりを他の教父たちが上昇のイメージで捉えるのに反して、シメオンは「海に入る」という下降のイメージで捉えていることを指摘した点などは本論文の特徴また独自の視点として、高く評価できる。

一方、シメオンの独自の思想が東方キリスト教会の伝統の中でどのように位置づけられるのかという問題、また、新神学者という呼称がシメオンに与えられている決定的な理由の解明などはまだ課題として残されている。

それにもかかわらず、本論文が関連文献を確認したうえで、基本的にシメオンのギリシア語原典を自ら緻密に読み込むことをとおして論考を展開していることは、著者の研究者としての十分な力量を示すものであり、本論文の特徴の一つとして高く評価できる。

平成 27 年 2 月 16 日

主査 (教授) 鳥巢 義文

(教授) 金 承哲

(教授) 西脇 純

(教授) 出村 和彦 (岡山大学)